

## 【書 評】

グンナー・ミュルダール (藤田菜々子 訳)

『ミュルダール 福祉・発展・制度』

ミネルヴァ書房, 2015年, 360頁

ミュルダール (1898-1987) は、スウェーデン出身の20世紀を代表する経済学者の一人であり、ケインズやシュンペーターなき戦後の冷戦体制 (第三次世界大戦の可能性) のもとで、社会学者として国際的に活躍した。その多様で広範な知的活動は、藤田菜々子 (『ミュルダールの経済学』NTT出版, 2010) によれば、理論経済学者の段階 (1930年の『経済学説と政治的要素』の刊行に結実する、経済学と価値判断という経済学史上の根本問題に挑んだ1920年代)、政治経済学者の段階 (スウェーデンでマクロ的不均衡と新しい財政政策、人口問題・社会政策に取り組んだ1930年代)、制度派経済学者の段階 (1944年の『アメリカのジレンマ』の刊行から、1968年の『アジアのドラマ』を経て、晩年までの人生の後半期) に分けることができる。

本書は、主に「制度派経済学者の段階」の著作活動に焦点を当て、「ミュルダールの多様な諸研究のそれぞれを代表するような論文を一通り選定する」(訳者解説) 視点で、1000を超える膨大な論文・著作から未邦訳の11本の重要論文 (4本の講演論文を含む) を選び、訳出したものである。

本書の目次は次の通りである。

- 第1章 経済学における目的と手段
- 第2章 景気循環における財政政策
- 第3章 人口問題と政策
- 第4章 社会理論と社会政策の関係

- 第5章 いっそう緊密に統合された自由世界経済に向けて
- 第6章 貿易と援助
- 第7章 世界の発展における平等問題
- 第8章 紹介への返答—経済学の発展における危機と循環
- 第9章 発展とは何か
- 第10章 制度派経済学
- 第11章 功利主義と現代経済学
- 解 説 ミュルダール経済学の方法・範囲・時代精神

各論文の内容と論点は訳書解説でいてねいに紹介されているので、評者としては本書を貫通するいくつかのミュルダールの問題を浮き彫りにし、本書の意義について考えることにしたい。

《方法としての価値前提の明示》

第1は、ミュルダールの経済学方法論の代名詞となっている価値評価 (価値関心) の明示の問題である。周知のように理論経済学者の段階のミュルダールは、『経済学説と政治的要素』においては、価値評価から独立した客観的知識としての経済学が可能であると考えていた。だが、1953年の『経済学説と政治的要素』英語版序文では、当初の方法的立場を撤回し、論理の前提として価値評価を選択・明示する理論的実践的必要性を主張するようになる。このとき彼は55歳である。以後、彼は、『国際経済』(1956) では「経済統合」、

『経済理論と低開発』（1957）では「政治的民主主義と機会均等」、『福祉国家を超えて』（1960）では「自由・平等・博愛」のように、論理的前提としての価値評価を明示したうえで研究をおこなっている。とくに、『アジアのドラマ』（1968）では、南アジアの開発研究の価値前提として、① 合理性、② 発展のための計画化、③ 生産性の上昇、④ 生活水準の上昇、⑤ 社会的・経済的平等化、⑥ 制度および態度の改善、⑦ 国民的統合、⑧ 民族独立、⑨ 狭義の政治的民主主義、⑩ 草の根民主主義、⑪ 民主的計画化といった「近代化諸理念」が明示された。

本書の第4章「社会理論と社会政策の関係」（1953）では、「価値評価の明示」の方法論に対する諸批判を踏まえて、「価値前提はいかに確定されうるか」について考察されている。本書の終章に所収された最晩年の論文「功利主義と現代経済学」（1987）も、主流派経済学に対する強い批判的意識をにじませながら、問題へのアプローチや諸概念の定義、観察事項の選定、研究結果の表明という、研究全体を決定する価値評価を明示することの決定的意義を強調し、価値評価に無関心な研究の広がりには警鐘を鳴らしている。しかし、価値評価の選定の説明には曖昧さが残されている。価値評価は、研究者の問題関心に依存するのか、研究対象となる現実の社会によって与えられるのか（社会にとっての妥当性・重要性・実現可能性）、あるいは、さまざまな社会集団の政治的態度の社会心理学的研究を通じて確定されるのか、不明確である。

#### 《平等の概念と世界福祉民主主義》

第2は、若き日にスウェーデンの人口問題（出生率の低下）に取り組み、『アメリカのジレンマ』で黒人が置かれている不平等の現状と複合的な原因を究明し、『アジアのドラマ』では南アジアの貧困問題を分析した、というように、ミュルダールは研究対象を変化させ

ているにもかかわらず、平等の問題への関心が維持され、平等が価値評価の選定のなかで最も重視されていることである。

彼は、本書第8章「紹介への返答——経済学的发展における危機と循環」のなかで、今日の平等の問題はケインズ革命を必要とした1930年代の雇用問題に匹敵するほど世界にとって重要である、という認識を示している。また、国際経済と低開発諸国の問題を扱った本書の第5章「いっそう緊密に統合された自由世界経済に向けて」、第6章「貿易と援助」、第7章「世界の発展における平等問題」においても、平等の問題は最も重要な政策課題として位置づけられている。

ミュルダールは、「よく計画された平等主義的社会改革は生産的である」（251）というスウェーデンの社会民主主義的福祉改革から引き出された命題の一般化（212）を志向し、この命題が実現するような、低開発や貧困を抱える途上国の根本的改革とそのための国際協力のあり方を研究している。彼は、スウェーデンの福祉改革の経験と低開発諸国の悲惨な現実の改革とを、「累積的（循環的）因果関係のモデル」（循環的因果関係は諸変化に累積的効果をもたせる傾向がある）によってつなげようとしている。しかし本書では、平等の概念についての説明が欠けているので、平等の問題と累積的因果関係論の関連は、社会改革や国際援助計画の議論で説明されているとはいえ、論理的に解明されていないように思われる。平等は、ミュルダールにとって、スウェーデンの社会民主主義の歴史から生まれた価値評価なのであろう。しかし、その理論的・思想的な意味を、「世界福祉民主主義」（212）という文脈において解明する課題は残されているように思われる。

#### 《ミュルダールとケインズ》

第3は、ミュルダールが、本書の随所で、とくに低開発諸国の貧困と援助の問題を扱っ

た箇所（第5章、第6章）において、国家の干渉や社会政策（社会計画）を個人の自由を侵害する全体主義への道として批判するハイエクや、市場の作用がもたらす世界レベルの不平等の拡大に無関心な主流派経済学に批判的なことである。彼は、市場の諸力の作用（とりわけ、貧しい地域の貯蓄を豊かな地域に送り込む道具としての資本市場と銀行システム）に対する意図的な諸干渉としての経済計画・国際協力や、そこにおける民主主義の重要性について強調している。このようなミュルダールの議論は、国際資本移動を制限して各国が完全雇用と社会保障制度を追求できる政策余地を制度的に保障する国際的枠組み

（国際清算同盟）を確立しようとした最晩年のケインズ（1883-1946）と、社会科学者としての関心を共有していると思われる。

また、平等の問題にこだわったミュルダールと、自由の問題に関心をもったマンハイムやハイエク、カール・ポランニー、アマルティア・センとの比較も、本書が示唆する経済思想史の興味深いテーマである。

以上のように、本書は、広い文脈でミュルダールの問題を考えるための重要な論文を選定して訳出している。多くの人に読んでいただきたい。

（若森章孝：関西大学名誉教授）